

返せ北方領土

宮崎商業高校3年
有田 和華子

3.7km先の故郷

今回の研修で最も印象に残っているのは、納沙布岬から見た景色である。東の最果てである納沙布岬からはわずか3.7km先に北方領土が見えた。

先人たちが切り開いてきた「日本の領土」は、こんなに近くにあるのに自由に出入りすることもできない。この場所から入ることのできない自分の故郷を眺める元島民の方々のやるせなさは計り知れない。

また納沙布岬では『四島の架け橋』と『祈りの火』を見ることができた。四島の架け橋は北方四島を四つのブロックで表現。それが互いに連なりあって大きな架け橋となり、領土返還を祈るゲートを表現している。祈りの火は昭和47年5月15日、祖国復帰した沖縄県波照間島で自然発火しキャラバン隊によって納沙布岬まで持って来られた。

『北方領土返還運動の火を絶やすな』というスローガンのもと52年経った今も火は燃え続けている。



平和的な解決

「軍事力での解決ではなく、平和的な解決を望む。」今回の研修中に度々耳にした言葉だ。この言葉は元島民の得能さんのお話のなかにも登場した。北方領土に住むロシア人と複数回交流してきた得能さんは、「交流の際にもロシア人は非常にフレンドリーに接してくれる。悪いのはロシア人ではないのだから、ロシア人を憎んではいけない」と話されていた。

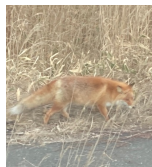
また、出前講座をしてくださった根室市内の高校生の話によると、街の中にはロシア語の看板も設置されており、ロシア人の同級生と机を並べて勉強することや近所のスーパーでロシア人を目にすることも日常だという。北方領土に暮らすロシア人にも家庭がある。元島民の方々の願いは軍事力の行使によって、この日常を壊すことではない。話し合いを進めていきながら互いに合意した上での平和的な解決を望んでいるのだ。

北海道に生息する動物たち

自然豊かな北海道では、宮崎でなかなか目にすることのない動物たちとも遭遇することがある。

バスでの移動中も、キツネやエゾシカの群れ、オオワシなどの動物を車内から肉眼で確認することができたのはとても貴重な経験だった。

また、根室市歴史と自然の資料館では、北海道東部でしか出会えないアジアラッコの話聞き、実際にラッコの毛皮を触らせていただいた。



近年の返還運動

- ①四島ロシア人青少年交流会
・一緒にスポーツをして汗を流したり、話をしたりして交流を深めている。
- ②ビザなし交流
・旅券（パスポート）や査証（ビザ）を持たずに互いの国を訪問することができる。北方領土を日本の領土とする日本の法的立場を害さない制度。
- ③署名活動
・地元の高校生が学校祭やその他地域の祭りなどで署名を集めている
・北方領土専門の施設でも署名可能

研修を終えて

私がこの研修に参加して、一番の問題だと思ったことは日本国民の北方領土問題に対する知識の低さだ。

研修から帰宅して、高校の世界史の教科書を開いてみたのだが、北方領土問題に関する記述や資料が少ないように感じた。私も自身も北方領土問題の深刻さや北方領土がロシアに支配された経緯の詳細は今回の研修に参加するまで知らなかった。同級生にこの研修の話をした時もありピンときていなかった。

ロシアによる北方領土の不法占拠から79年経った今日、元島民の方々の高齢化が懸念されている。元島民の方々の一日でも早い帰郷を実現するためには、当事者だけ、や北海道民だけ、が問題解決に向けて動いていくのではダメだ。北方領土はれっきとした日本の領土なのである。日本国民全員が国の問題として返還運動に取り組むべきだと考える。

そのためには、まず北方領土問題について「知る」ことが大切だ。私たち17名は今回、元島民の方や根室市に住む高校生から話を聞いたり、実際に肉眼で北方領土の島々を眺めたりと実際に現地に行かなければわからない経験をしたことができた。現地の高校生の話を聞いたときに言われた「今日からはあなたたちも発信者の一人です。」という言葉がとても印象的で忘れられない。まずは私たちが発信者となり、北海道から遠く離れたこの宮崎県から発信者を増やしていこうと思う。

北方領土問題に対する国民の知識・関心を深め、ロシアへの偏見を捨て、ロシアを理解することこそ元島民の方々が願う『平和的な解決』を実現する第一歩になる。